

徳島県地域包括ケアシステム学会 市民講座

令和4年
日時 **2月19日 土**
午後2:00～午後4:30

場所 **ホテルグランドパレス徳島**
徳島県徳島市寺島本町西1-60-1
状況によってはZOOM配信のみになる可能性があります。

開催趣旨

多様性、ダイバーシティということが盛んに言われています。この社会には色々な人がおり、色々なことから成り立っています。誰でもこのことを分かっているが、ついつい自分の周りしか見えないし、あるいは一方向からしかみられないものです。多様性を認め合うことが持続する社会や地域をつくるた

めには必要です。本市民講座は、多様性をキーワードに、地域包括ケアシステムに関わる問題を女性活躍も含め様々な角度から眺めたいと思います。

徳島大学大学院 教授 **市川 哲雄**

プログラム

2:00～2:05

開会挨拶

尾崎 俊雄 (四国厚生支局長)

2:05～3:05

基調講演 座長/永廣 信治 (吉野川病院 病院長)

「古きをたずねて新しきを拓く:医療の二側面」

狩野 光伸 (岡山大学大学院 教授/
外務大臣次席科学技術 顧問)

3:15～4:15

パネルディスカッション 座長/市川 哲雄 (徳島大学大学院 教授)
助言/狩野 光伸 (岡山大学大学院 教授)

地域包括ケアの多様性～徳島の女性活躍から～

「コロナ禍における通いの場の有用性」

北村 美渚 (稲次病院 社会福祉士・歯科衛生士)

「ホスピタルアートとその輪の広がり」

田中 佳 (徳島大学大学院 准教授)

「美波町における移住支援」

小林 陽子 (一般社団法人アンド・モア代表理事/
徳島県移住アドバイザー)

4:30

閉会

指定発言 多田 敏子 (徳島大学名誉教授 令和4年度学術集会大会長)

※ 令和3年度徳島県地域医療介護総合確保基金事業費補助金(介護分)の助成を得て実施しています。

主催/徳島県地域包括ケアシステム学会 後援/徳島県・徳島新聞社・徳島大学病院・徳島大学歯学部

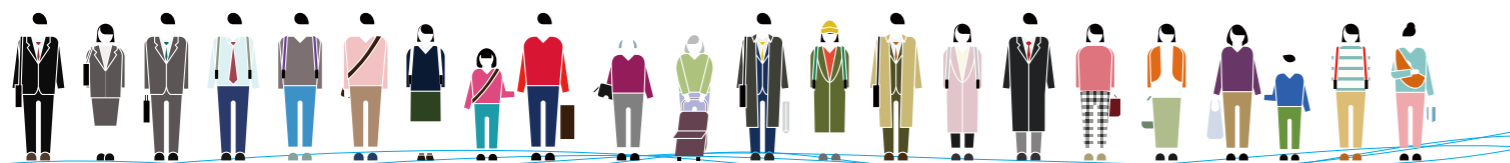
問い合わせ先

徳島県地域包括ケアシステム学会事務局

〒770-8504 徳島市蔵本町3-18-15

徳島大学歯学部口腔保健福祉学講座内

TEL/FAX: 088-633-9171(平日 9:00 ~ 16:00)





古きをたずねて新しきを拓く： 医療の二側面

略歴 狩野 光伸 かの・みつのぶ

1999年東大医卒、聖路加国際病院で臨床経験。東大院修了後、医工連携で睥がんナノ医療開発の傍ら東大医の研究者育成プログラム設立を担当。2012年より岡山大教授、院ヘルスシステム統合研究科の設立理念を主導。同大副理事としてSDGs達成を推進し政府表彰。2019年より外務大臣次席科学技術顧問。日本学術会議第二部会員。ほか文部科学省科学技術・学術審議会委員、JST自己評価委員・CRDS特任フェロー、本田財団理事、DDS学会理事、などの役割を担う。

私たち人間は、生まれて成長するに従い、徐々に能力を獲得していきます。成長は喜ばしいことです。こうした能力が何かの理由で損なわれた際に、回復あるいは悪化させないで済む古くからの知恵の蓄積が、医療です。医療現場は安全が重要ですので、「既に蓄積されている知識」を総動員して、仕事が進んでいきます。

しかし人間は歳を取ると、成長で獲得した能力を徐々にまた失っていくようにも、なっています。失う程度、時期、速さは個別的ですが。歳を取って失っていく能力は、願わくは少ないに越したことはありません。しかし、失われる能力は、努力で減らせる範囲は多少あっても、努力では減らせない不可抗力の範囲も少なくない様子です。医療技術の進歩により、感染など身体外からの原因による死は遠ざけられたとしても、自らの体の経年変化による不具合や、能力の減少は、簡単に制御できません。いわゆる副作用をもたらさないために必要な、異常と正常の分別が明確にはしにくいからという側面もあるでしょう。例えば、各臓器の機能、運動機能、認知機能を含めた高次機能。ここで医療は何ができるでしょうか。古い知恵の活用だけでしょうか。医療のもう一つの側面として、「新しい知恵の創出」も必要になるのではないのでしょうか。創出においては生物的側面だけでなく社会的側面も考える必要があるでしょう。ということは、医療の現実を知ったうえでなければ、現実的な知恵は浮かばないでしょう。すなわち、医療にかかわる中で、「古きをたずね」活用するのみならず、「新しいことを拓く」必要もあると思うのです。

「拓く」際の現実の難所を顧みれば、私たちの社会は、成長につれて獲得される能力の中で、個々人が能力を高く保ち「お互いに、期待通りである」ことを「当たり前」と設定して動いている印象です。それにより保たれる社会の機能は少なくない一方、同じ設定によって社会に参画しそびれる方々も少なくない状況になっている印象があります。社会に参画するとはどういうことでしょうか。それは、自分が助けられ受け取るだけでなく、自分も助け与えて、喜んでもらえるというサイクルに参加することでしょう。少なくとも現時点での「お互いに、期待通り」程度の能力を持たない状態に至っていたとしても、そのサイクルに参画していけるようにするにはどうしたらよいか。

ここが昨今の大きな問いではないでしょうか。これに「古きをたずねて新しきを拓く」医療はどうこたえられるか。ぜひ皆様とともに考えるきっかけになったらと思います。



稲次病院 歯科衛生士
社会福祉士
北村 美渚

コロナ禍における通いの場の有用性

板野郡藍住町の稲次病院、介護老人保健施設昂で歯科衛生士・社会福祉士として従事しています。私は、徳島大学歯学部口腔保健学科を卒業し、修士課程を修了、その後、稲次病院に医療ソーシャルワーカーとして就職しました。現在は、博士課程で学びながら、通所リハビリテーションの歯科衛生士として、地域在住高齢者の口腔機能の維持・向上を目指し、日々努めています。今回は、コロナ禍における「通いの場」の有用性についてお話しさせていただきます。「通いの場」参加者の方々は、コロナ自粛による心身機能の大きな低下が少なく、「通いの場」で活動されている高齢者の方々の日々のがんばりや、「通いの場」の重要性が示されました。

ホスピタルアートとその輪の広がり

ルーヴル美術館の創設史を研究する傍ら、2018年度から、学生と共に徳島県内の医療機関にホスピタルアートを導入する活動を続けております。マスキングテープという新たな素材を使うことで、病院職員の方や患者さんも一緒に制作に参加してもらうことができ、コミュニケーションの促進にも役立っているようです。アートとは単なる装飾やレクレーションに留まるものではなく、医療やケア、地域の課題においても肝となる「共有」「共感」を別の仕方で表現するものです。病院内外の人々との共創活動の一端をご紹介しますながら、ホスピタルアートの可能性について考察します。



徳島大学 大学院
准教授
田中 佳

美波町における移住支援

地元の美波町に大阪からUターンしたのは40年前。最初に感じたのは「えらいこっちゃ」稼業の新聞店は儲かるよ、と夫を説得して帰ってきたのに、町の人口は減り、空き家だらけ。このままでは町がなくなってしまうと危機感を強くもった。帰ってきたときの移住者として感じた苦勞、来る人に味わってほしくないと思われ移住支援を開始。以来40年にわたって移住に関わってきた。移住者は千差万別。移住先での人間関係、生活環境の整えなど、どこに何がどうしたら…、支援は多岐にわたる。どうすれば地域に馴染みここで暮らしてもらえるか。活動に終わりはないと考えている。



一般社団法人アンド・モア代表理事
徳島県移住アドバイザー
小林 陽子

多様なサービスを可能にする地域包括ケアシステム

指定発言者として、市民講座に参加の機会をいただき、誠にありがとうございます。本講座のキーワードは地域共生社会に欠かせない「多様性」となっています。

ことさらに「男性」、「女性」と区別するつもりありませんが、女性は公私にわたり多様な役割を担っている存在だと思っています。それゆえに、変化に柔軟に適應できる特性も持ち合わせているように見えます。私が加入している「婦人会」では、子どもから高齢者まで、あらゆる年齢を対象とした事業を計画しています。公民館や地域包括支援センターなどの協力を得て事業を展開していますが、地域での活動が広がり、連携も進んでいると認識しています。また、通いの場といわれる「サロン」や「生き生き百歳体操」の参加者にも女性が多く、先日受講した「認知症サポーター養成講座」の受講生も、大半が女性でした。誰とでも気軽に話ができ、生活に不可欠な衣食住のどの領域でもお手伝いできる生活の術を持っている点が、女性の強みだと思います。徳島の女性は、情熱や行動力があるといわれていますが、ご発表が予定されているホスピタルアートのように、新たなサービスを創り出す力もあると思います。地域包括ケアシステムは多様なサービスの展開を可能にしてくれると期待を寄せています。より多様なサービスを展開するためには、一人一人が生活に関心を寄せ、地域に愛着を持ち、臆せず、できることを実行することが大切だと思います。



徳島大学 名誉教授
(令和4年度学術集会 大会長)
多田 敏子